

「中国報」(中国レポート 第十四号)

おすすめ書籍 (番外編)

～新型コロナ禍の出張不可能状態のため番外編：おすすめの中国関連書籍情報～

いま中国人は中国をこう見る

中島恵著 日経BP

コロナ禍の2021年4月にZoomを使ったオンラインセミナー(国際問題研究会・中国研究会共催)でご登壇いただいた中島氏の近著。氏の著書は実際のインタビューや取材などの実体験に基づいた内容をもとにしているのも特徴。中国人の知己も多く、生の声が反映されており、その時々 of 中国の実像を知る事ができる内容の著書が多い。

コロナ禍で自由に往来のできない状況下でも、これまでに培った人脈を活用してオンラインや時には日本にいる中国人とコンタクトすることで、本書は著されている。

コロナ禍で都市封鎖や居留している地域ごと閉鎖された場合、彼らはどうやって生活しているのだろうかという疑問を抱くが、日本でいう自治会的な役割を果たしている「居民委員会」という組織が、重要な役割を果たしてくれているようだ。

これは地方政府の末端組織で「社区」と呼ばれるマンション群または一定のエリアを管轄する組織とのことだ。この組織の委員長は公務員で、専従メンバーも「準公務員」のような役割を果たしている。彼らがいるおかげで、食料の配給や団体での購入などができるわけだ。そして住民と居民委員会のメンバーをつなぐのは、SNSのグループチャットという。

日頃からアパート内で近所付き合いの少ない、単身赴任の駐在員などは、彼らの世話になることで、長期間に渡る「隔離」下でも食料を調達できているのだろう。SNSでのやり取りは中国語だろうから、必要な食料それぞれの名前を、スマホに入力しないと行かないわけだろうから、食材の名前をきちんと覚え、スーパーで現物をみて購入していた筆者などは、コロナ禍の中国で生活するとなるとかなりの困難がともないそうだ。

中国人はネットでの政治談義が盛ん(もともと井戸端会議を中国人は好き)だが、コロナ禍以降習近平主席の求心力が高まり、この1～2年ネットでの政治談義は、すっかり消えてしまったらしい。習氏を習大大(習おじさん; そういえば以前は親しみを込めて呼ばれていた記憶がある)と呼んでいたのも、今は使えなくなっているらしい。こういう事例で、今の政権と国民との間合いもわかるような気がする。

高速鉄道の利用者のニーズにも変化が生じているようだ。どちらかということでは、座席での通話は自由で、忙しそうなビジネスマンの隣などに座ると、のべつ幕なしで電話を掛け、大声で話すので、隣にどういふ人が座るかは、まさに運試的な要素が強かったが、20年12月から「静音車両」というのが導入され、座席での通話が禁止の車両も登場したという。

BRTという専用レーン走行するバスも「社内での飲食」「電子機器の音漏れ」「靴を脱ぐこと、足を前の座席の上に乗せること」「口を覆わずに咳をすること」が禁止されるよ

うになったとのことで、周りに迷惑をかけないというエチケットが社会に広く浸透してきているようだ。

選挙で政権を選択するという政治制度のない中国では、政権は世論の支持を得られなければ、政府の正当性について国民から認められないという意識があり、かえって世論の動向に対して敏感な面もあり、権威主義だからといって国民の意見が反映されないというわけでもないという。

また、2021年にはここ数年にない傾向、反日的な雰囲気も出てきていると著者は指摘する。日本（海外）を褒めることは中国を貶めることだと曲解される傾向があり、「中国は偉大な国だ」と心から信じていて、排他的になっていることがその理由だという。

従来の批判の矛先を日本（外国）に向けるというのではなく、自分たちの国は素晴らしいのに、それがなかなか世界から認められないことに不満をつのらせ、海外のいい話を聞きたくないと感じているようで、この傾向はコロナ禍をきっかけに一層強まったように感じている人もいるようだ。アメリカと対等になったという自負がそうさせている部分もあると分析している。

自国製品に対する感覚も変化してきており、国産品に対する評価もこれまでのダサい、品質が悪い、すぐ壊れるといったイメージからカッコいい、デザインがいい、おしゃれと正反対に評価する傾向があり、いわゆる「国潮」という国産品への回帰も若者の間でみられるという。

一方で若者の間には、寝そべり族（躺平族）のような無気力な若者もあらわれており、未来に夢を持たないあきらめムードの若者も増えているようだ。

コロナによって海外メディアへの信頼度が低下（トランプ政権下のFOX TVなど）しているようだ。国内での論争も、もとなつた意見を確認せず、表面的に流れる傾向などもあり、論争自体が歪んでいる場合もあるという。こういう傾向は、洋の東西を問わない傾向なのかもしれない。

書名にあるように、現在の中国人が自国をどうみているのか、多面的に知る一助になるのではないかと思う。

(2022/05 森山博之)

本レポートに関する問い合わせ先：<https://arc.asahi-kasei.co.jp/contact/>